

ワガドゥグにおける染色綿布、ボゴラン Bogolan の製作過程

清水 貴夫

要旨

本稿は西アフリカのサヘル地域、ブルキナファソの首都ワガドゥグのボゴランの制作過程を明らかにする研究ノートである。

ボゴランはブルキナファソの西側に位置するマリ西部、ベレドゥグにその起源があるといわれている。ボゴランはベレドゥグでは女子割礼の際に儀礼を司る老女と割礼を受ける少女が使用していたとされている。一方でワガドゥグではボゴランは手工芸品として位置付けられる。ワガドゥグでのボゴランの位置づけはマリに起源があるとしつつ、ワガドゥグで生産されていることもあり、ワガドゥグの土産物として確立している。

ボゴランの材質は綿であり、多くの場合、ブルキナファソで生産された綿を使用している。綿布を染めるのは、アルジル、樹木の煮汁などであり、こうした染料によって描かれるのは、抽象的な幾何学模様や西アフリカの農村の生活風景などが見られる。ワガドゥグで販売されているボゴランは、その基本的なスタイルを守りながら、都市的な文化交流を通してワガドゥグ独自の傾向を見せ始めているのである。

1. はじめに

1.1 本論の目的

本稿では、筆者の調査地であるブルキナファソ Burkina Faso の首都、ワガドゥグ市 Ouagadougou におけるボゴラン Bogolan の生産過程とボゴランの生産に関わる人について記述する。

そもそも、ボゴランはブルキナファソの隣国のマリ共和国 République du Mali の名産品として有名である。ブルキナファソでも多くの手工芸品販売者によって、ブルキナファソの土産物として、おもに外国人観光客に対して販売されている。筆者はこれまでにストリートに展開する、こうした商品を扱う手工芸品販売と製作の担い手であるラストの生活信条や生活実践に焦点を当てて研究を進めてきた。

本稿の目的はふたつで、民族誌的な記述を中心とする研究ノートの形式をとる。まず、彼らが販売する代表的な商品のひとつがボゴランである（清水 2007）。彼らが扱う商品について、「ものづくり」研究の視点からボゴランを照射していくことが本稿の一つ目の目的である。そして、元々、現在のマリの諸民族によって作られてきたとされるボゴランが、現在では隣のブルキナファソでブルキナファソの主要な土産物ものとして販売されるのは、ワガドゥグの都市的な異種混雑性にその理由を求めることができる。ボゴランは、ワガドゥグの都市的状况を表象しており、このことを論及しておくことが本論のもうひとつの目的である。

ボゴランは綿布を泥や樹木の葉、茎などで染色したものである。そして、ボゴランの地布の原料の綿は、西アフリカの重要な産物であり、綿について考察することは、モノと生活を考える上でも意義深いものである。したがって、本来、本研究を進めていくためには、綿花の生産

から綿布づくりの過程を記述する必要があった。しかし、これまで都市に注目した筆者の研究の経緯から、本稿では都市に視点を据えることを優先していくこととし、村落で行われる綿布づくりについては本稿では取り上げなかった。これについては、稿を改めて論じたいと思う。

1.2 調査地概要

ブルキナファソは西アフリカの中部に位置する内陸国である。国土はサハラ砂漠南縁部に位置し、気候帯は乾燥帯から乾燥サバンナ気候に属する。10月から5月までが乾季、6月から9月が雨季に当たる。年間降水量は北部の特に乾燥したサヘル地域が300mm、南西部の多雨地域が1300mm、首都ワガドゥグでは700mmから900mmである。中部に位置するワガドゥグにおいてさえ、乾期の終わりには50度を超える日もあり、この地域は世界で最も気温の上がる地域のひとつである¹。

面積は約274,000k m²（日本の約3分の2）で、国土の多くはラテライトに覆われている。農業生産の中心に唐人ビエ（ミレット）mill、ソルガム sorgho など雑穀、および根菜類である。近年、殊に都市部では米食が定着し、米の需要が高まっている。陸稲も多く栽培されるが、台湾の援助により、水稻は比較的雨量の多い国土の西側と水利の整備された貯水池近辺で盛んに行われている。ほかに綿や落花生の栽培が換金作物として盛んに行われている。ボゴランの原料の綿はこうした土地でも育つ作物、西アフリカの乾燥地域における換金作物として重要なものである。

ブルキナファソの人口は約1,100万人から1,400万人と推測される²。ブルキナファソは80%が農業従事者とされている農業国であるが、他のアフリカ諸国と同じく都市への人口流入は著しい。特に首都のワガドゥグ、第2の都市ボボ・ディウラッソ Bobo Diulasso などの大都市への人口流入は特に際立っている。ワガドゥグでは、1990年代初頭には60万人であった人口が2000年を過ぎると100万人から150万人と推定されている。すなわち10年程度の間に3倍の人口を擁する都市に拡大している。ワガドゥグの人口増加と都市の拡大の過程では、周囲7村を飲み込んだ。さらに欧米や、近年では殊に中国を初めとするアジア諸国から、歴史的には西アフリカに数多い移住者を送り込んでいるレバノン人など中東からの移住者も目立つ。こうした都市の他民族化、多国籍化は現在のアフリカの都市の一般的な特徴である。

1.3 都市における手工芸品

手工芸品に関わる人びとの移動は、民族的な異種混雑状態にある都市性と密接に関係する。現代アフリカの人びとの移動や都市の複雑な社会構成を明らかにすることは、これまでのアフリカ都市研究の中心的な課題であった。本稿における手工芸品の変容や他地域のモノの移入についてもこうした都市的状况が反映されている。西アフリカのアート（African art）の交易はアフリカ諸国の独立の直前の1950年代後半にマンデ Mande やウォロフ Wolofなどを担い手として発展してきた（Steiner1994:4）。拙稿でも述べたように、現在ワガドゥグで販売される手工芸品の多くがブルキナファソのものではない（清水2007、2008）し、同様に周辺国の手工芸品マーケットにおいても周辺地域に端を発する手工芸品が販売される時に、その地域、国の手工芸品として販売されている。

そして、都市における手工芸品のビジネスを説明するには、現在のアフリカの都市的状況が生み出す困難を切り抜けるために関わる商業活動であることも踏まえておく必要がある。比較的容易に外貨を獲得できる手工芸品ビジネスは大きな初期投資も不要なため、参入もさほど難しくはない。今日のアフリカの都市空間には、さまざまな論考に描かれているように、慢性的な失業状態にある人が多く、こうした人びとが手工芸品ビジネスに参入している³。しかし、仕事がないために手工芸品に関わるばかりではない。その理由の一例として、手工芸品にアイデンティティを見出すということもこのビジネスに関わる動機として挙げられることは筆者の研究で述べている（清水 2007）。

2. ボゴランの歴史

2.1 ボゴラン Bogolan とその起源

まず、ボゴランの定義を述べておく。ボゴランは主に泥や樹木の葉を用いた染料によって、幾何学模様やアフリカの農村の生活風景などが描かれた縦60cm、横120cmほどの綿布である。マリ Mali に起源があるとされるが、現在では西アフリカ全域の手工芸品店を中心に見ることができる。本稿の舞台である、ブルキナファソやマリ以外の地域では、主な用途は観光客相手に販売するための手工芸品であることが多い。

ボゴランのその語源に従った正式な呼称は、バマナ語 Bamanakan でボゴランファン bogokanfani (n) と言う。バマコなど都市のアーティストなどによって慣習的にボゴランと呼ばれる。ボゴランという名前は、bogo「泥（英 clay/mud）」と「～による（英 with）」という意味の lan、さらに、語尾の fani ないし fanin は「布」を意味する（Rovine2006:2）。つまり、ボゴランは「泥による布」ということを意味する。

何度か触れてきたように、ボゴランのルーツはブルキナファソの隣国のマリである。ワガドゥグの手工芸品マーケットでは、マリの最大民族であるバンバラ Bambara やドゴン Dogon と言った民族がボゴランのルーツとして語られている。マリのボゴランを研究したロビンは、ボゴランのルーツは首都バマコの北側に位置するベレドゥグ Beledougou に住むバマナ Bamana の人びとと述べている（Rovine2006:16）。

ボゴランは発祥とされるマリのほか、セネガルやブルキナファソ、さらにガーナなど、西アフリカ全域の手工芸品売り場で目にすることができる。西アフリカの主要産物のひとつである綿と、異国情緒を誘う文様が描かれたボゴランは、西アフリカを象徴する代表的な手工芸品 Tourist Art⁴ と位置づけられる。しかし、2.2 で述べるように、元々はマリのバマナの人びとによって儀礼で用いられた布である。特にボゴランの起源とされているベレドゥグにおいて、女子割礼⁵の際に儀礼を司る老女と少女たちの双方に用いられるとされている（Rovine2006:16）。この際、用いられるボゴランには、さまざまな象徴的なデザインが描かれており、バマコなどで販売されるボゴランに描かれているのも、こうした「伝統的」なデザインを元にしたものも多く含まれている。

村落で用いられるボゴランは、以上のように儀礼を行う際に着衣として使用されるためのものであった。しかし、現在では手工芸品、芸術的価値が付与されたファイン・アート、スタジオ・アートの3つのタイプに分類される（Rovine2006）。次章では、現在のボゴランの分類と、

ブルキナファソの「伝統的」な綿布、アンディゴについて論じていく。

2. ブルキナファソのボゴランとアンディゴ

ロビンはマリで生産されるボゴランを手工芸品 Tourist Art、ファイン・アート Fine Art、スタジオ・アート Studio Art の3つのタイプに分けた。マリにおけるこの分類とブルキナファソにおける綿布の状況は幾分異なる存在感を示している。ブルキナファソの手工芸品として有名な藍染めの綿布があるためである。

藍染め綿布は「アンディゴ」(藍 indigo) がそのまま藍染の綿布を指す。ブルキナファソのアンディゴは、大きく分けて日本の藍染にも見られるような絞り染めと、藍で均一に染められたものがある。絞り染めは麻縄などで綿布を縛り、藍染めを入れるところと白く残す部分のコントラストをつける。染めが終わると、3度から4度に渡って水で洗浄する。この洗浄の回数が少ないと、普段使用しているときにも藍が落ち、触った手が青くなってしまう。現在ではワガドゥグの街には、アンディゴを腰や頭に巻く女性はほとんど見られないが、ブルキナファソではこのアンディゴが伝統的な女性の衣服である、と語られている。

後に示すように、多くの場合アンディゴとボゴランは、同じ販売者によって市場に出回る。同じ綿製品であるためだということが第一の理由である。また、近年、ワガドゥグのボゴランには青が使用されるようになったが、その青がアンディゴから抽出されたものである。青はマリのボゴランには見られない、ブルキナファソ独特な色使いである。

しかし、一見盛んに見える綿産業ではあるが、今日のワガドゥグの衣料品事情を見ると、明らかに化学繊維製品が綿製品よりも主流になっている。それは、ボゴランやアンディゴのような綿布が、パーニュ pagne やパイン paine と呼ばれる化繊製品に比べて高価であること⁶、化繊製品の多彩で多様な模様、そして、綿布に比べて科学洗剤に強いために化繊製品が実用品として定着していると考えられる。

現在でもブルキナファソの「伝統的」な衣料品であるといわれるアンディゴの存在もあり、ブルキナファソの手工芸品のマーケットには、綿布そのものを見つけることは難しくないが、外来のボゴランは、日常的な用途よりも手工芸品として認知されることになっているのである。

3. ボゴラン製作の原料と製作過程

3.1 綿布

綿の栽培はブルキナファソをはじめ、西アフリカの広範な地域で栽培されている。綿花栽培は、フランス植民地時代にフランスへの輸出を目的として広まった。モノカルチャー経済の代名詞として語られるが、現在に至るまで西アフリカ諸国の経済を支える農産品である。

生産された綿は、生産された村や近隣の小都市で糸にされ、さらに帯状の布に織られる。この帯状の

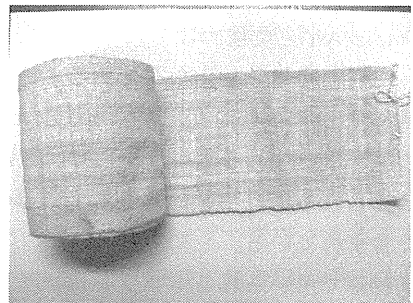


写真1 コットン・モシ

綿布は、幅 10.5cm から 12cm ほどで、直径 60cm 程度のロールにして出荷される。このロールはコットン・モシ Cotton Mossi (写真 1、2) と呼ばれ、ワガドゥグ市中心部にある、グラン・マルシェ Grand Marché 周辺を中心に販売されている。

コットン・モシはパイン Pagnes かクブルテュル Couvreur と呼ばれる単位で繋ぎあわされる。コットン・モシは 1 本 190cm ほどの長さに切り取られる。1 パインの場合はこのコットン・モシを 12 本か 13 本繋ぎ合わされる (写真 3)。繋ぎ合わされるコットン・モシが 12 本になるか、13 本になるかはコットン・モシの太さによる。前述のように、コットン・モシの太さは必ずしも一定の太さではないが、繋ぎ合わされる本数によってコットン・モシの太さの差が調整されるのである。ちなみに、マリで生産されるロールの太さは 15cm から 20cm、つなぎ合わせる本数は 6 本から 8 本である (Rovine2006 : 17)。従って、ブルキナファソのボゴランはマリのものよりも多少大きいことになる。

コットン・モシは染めの行う工房(アトリエ atelier)などに購入される。工房によって繋ぎ合わせの作業をするのはその工房による。利用可能なスペースやミシンの有無、また、繋ぎ合わせに割ける人手の有無が決定要因になっている。

筆者が調査した 2 つの工房と 2 つの販売店のうち、1 つの販売店のみで繋ぎ合わせの作業を行っている。この販売店は、ワガドゥグ市中心部にある通称バグダ Bagdad と呼ばれる区画にあり、販売者がミシンを所有し、染めを行う工房へ白地の綿布を売って、染めの終わったボゴラン、アンディゴを再度購入している。

ボゴランを製作するのは、ボゴラン製作を専門的に請け負う家族や親族でアトリエを営む人、手工芸品の販売店を営んだり、そこで働く人などによる。ワガドゥグのような都市であれば、糸を紡ぐ工程を女性が担うことがあるが、それ以外のほとんどの工程は男性によって行われる。

3.2 染料

ワガドゥグのボゴランの染めの多くは天然染料が使用されている。他方でセネガルやマリでは、しばしば科学染料が使用されている。この差はボゴランの仕上りのときに差が出る。ワガドゥグのボゴランはしばしば色落ちするのに対し、マリ、セネガルのは色落ちしない。また、仕上りの色はマリやセネガルがよりツヤがある。

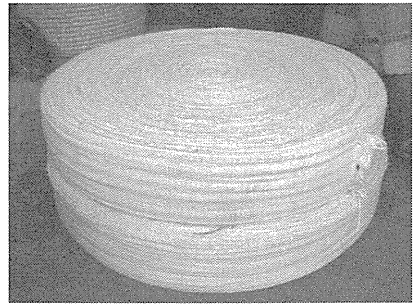


写真 2 コットン・モシ (ロール、2 段重ね)



写真 3 コットン・モシをつなぎ合わせたもの



写真 4 シーガ

ブルキナファソのボゴランの染色作業の第一段階は、白い状態のボゴランの地綿布の全面を黄色に染めることである。これはいわば基礎染色と呼ぶべき作業であり、すべてのボゴランにこの作業が必要とされる。右の写真にあるシーガと呼ばれる、樹木の葉を一旦乾燥させたもの（写真4）を水で戻した時の戻し液を使用する（写真5）。今回の調査ではシーガの樹木を確認できなかったことを断っておく。しかし、シーガの樹木はワガドゥグなど都市部においても道路脇に植えられているが、バド氏によれば、都市部のシーガと村落のものとは全く品質が異なるという。村落のものでないと、その後の染色の色がきれいにでない、と説明している。

染色過程に述べる前に、ボゴランに使用される色を見ておく。バド氏が使用する色は、黄色、青色、赤色、黒色である。緑色や紫色、茶色などはこれらの色を混ぜ合わせて作られる。バド氏によれば、基本色は黄色、黒色、赤色であるという。

さて、次に使用するのは黒色である。黒色は、ボゴランが泥染めといわれる所以となった泥を使用する。バド氏もサヌー氏も泥にアルジル argile（粘土）を使用する。バド氏はこのアルジルを業者から購入している。サヌー氏は雨季の水量が多い時期を除き、ワガドゥグ市の北側のバラージ barrage（ため池・ダム）で採取する。アルジルは採取されたあと、水に溶かして1昼夜寝かせる。このアルジルの液は白い布にそのまま塗っても黒い色は出ない。アルジルで黒色を出すためには、先に基礎染色を行ったシーガと反応して黒色が定着する。

染料の最後は、赤色である。赤色の原料は赤ソルガム sorgho rougé の茎である。収穫期に食用の穀物として採取された赤ソルガムの茎は、工房に持ち込まれ、約同量の水とともに数時間煮詰められる。この液が冷めて茎を越したものが赤色染料となる（写真7）。

ボゴランにはしばしば白色の部分が見られる。白色の部分は、染めが行われるわけではない。これには、ふたつの方法が見られる。ひとつ目の方法は、洗濯洗剤⁷を、少量の水で溶き、あらかじめ染めない部分にこれを塗っておく。こうすることによって、その部分に色がうつらずに白く残るのである。もうひとつは、漂白剤 eau de Javai と洗濯洗剤⁸の混交液を使用する方法である。これは、基礎染色が終わった後、デザインのデッサンに沿って白色にする部分を脱色する。実際に後者の方法をとるバド氏は脱色 Decolourer という語を使用してこの作業を説明した。



写真5 シーガを水につける

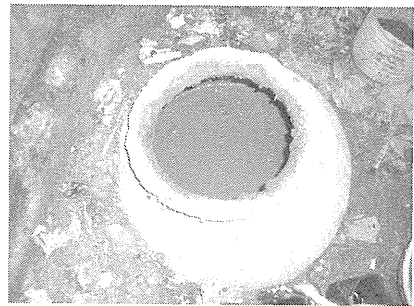


写真6 アルジル argile(粘土)



写真7 赤ソルガム sorgho rougé

以上がボゴランに使用される基本的な染料である。マリからワガドゥグに持ち込まれるボゴランのほとんどは、黄色と黒色、白色と黒色、黄色と黒色と白色の組み合わせになっている。しかし、ワガドゥグで生産されるボゴランには、緑色や茶色、さらにそれぞれの色の加減は多様である。こうした色を出すためには、これらの基本染料を混ぜ合わせて使用される。

3.3 デッサンから染色作業

ワガドゥグにおいては、ボゴランのデザインは最初に下書きのデッサンを描く。下絵のデッサンは通常チョークで行われる。その後の染色の作業は写真8の刷毛を使って行われる。

デッサンが終わると、3.2で見た染料を使ってデザインに色をつけていく。右の写真9のようにチョークの上を、黒色染料でなぞって絵の輪郭をはっきりさせる。黒色染料は一度描いてしまったところはその後消えることはない。ここが最も注意を要する過程である

とバド氏という。このときに線の外にはみ出すことや、黒色染料が飛び散ることがある。バド氏はこうした場合は、新たな柄を描くことで、修正する。この過程まではバド氏もサノウ氏も型紙などを一切使用せず、フリーハンドで作業を行う。しかし、よく使用される柄を描く場合、写真10にあるような型紙を使用することで、図案の失敗を予防する。

ロビンが観察したボゴラン製作においては、自らを「伝統的」ボゴランのアーティストと考えている者はフリーハンドでデッサンを行う傾向にある。し

かし、大量生産が必要な手工芸品のボゴランになると、熟練技術を必要とするフリーハンドで描く部分は減っていく。大量生産をするためには、一枚のボゴランを作成する時間を短縮すること、さらに未熟練な職人であっても多くの工程の仕事ができることが重要である。そのため、デザインを模った型紙が使用されている (Rovin2006: 41)。

バド氏やサノウ氏の工房においても同様に、いくつかのよく使用されるデザインの型紙が使用されている。黒色染料による縁取りが終了する時点でそのボゴランのデザインがすべて決まる。デザインは、「伝統的」とされる幾何学模様や動物、サヘル地域の農村の生活の風景を描いたものがある。デザインの傾向は、各々の工房、生産者によって異なる。サノウ氏の工房では、幾何学模様やシンボリックの大柄なデザインが多く、バド氏のボゴランは細かく創作的なデザインが多い。

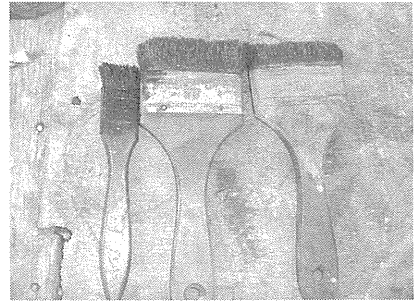


写真8 染色に使用する刷毛

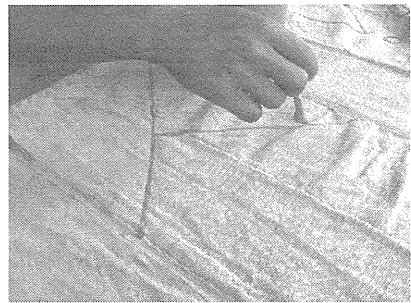


写真9 デッサンの上塗り



写真10 型紙

デッサンが終わると、下地の色になる染料に付け込む作業を行う（写真 11）。この作業によって、最初に染色した黄色から、基本的には赤や茶といった暖色の色にすることが多い。染色をすると、天日に干し、よく乾燥させて色を定着させる。乾燥期間は雨季の場合には3日ほど、乾季の特に暑い期間は1日ほどという。当然のことながら、色を重ねれば重ねるほど時間がかかることになる。1枚のボゴランを製作する過程に1週間から10日の時間がかかる。雨の降らない乾季は連続して仕事が可能であるが、雨季には染めの過程が遅れる傾向にあるという。

こうして完成したボゴランは写真 12、写真 13 のようになる。マリのボゴランは、黄色－黒色－白色、黄色－白色、黒色－白色のパターンのものが多く、サノウ氏の工房で制作されたボゴランは下地の色（黄色や赤色、茶色など）と黒、白といった3色程度を用いたマリのタイプに近いものが多い。バド氏のボゴランはそれに対して、黄本色の黄、赤、黒に加え、青や緑を多く用いている。



写真 11 染料に付け込む

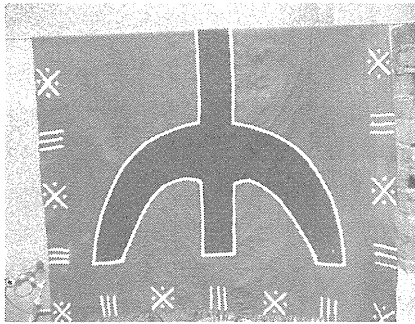


写真 12 完成（サノウ氏）

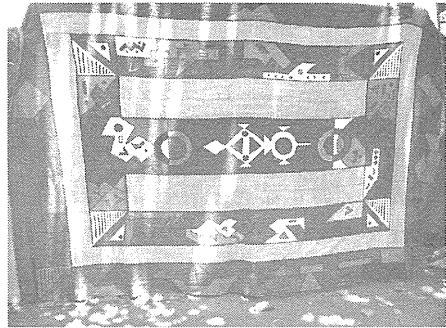


写真 13 完成（バド氏）

4. ワガドゥグのボゴランの販売

4.1 ボゴランに関わる人びと－バド氏とサノウ氏

ワガドゥグには市内各所でボゴラン製作に携わる人がいる。本稿で述べてきたのは、2006年に行った市内南部のパドワ Patte d'oie にあったサノウ Sanou 氏の工房と、2008年に行った国立芸術センター（Centre National d'artisanat d'art 以後 CNAА）のバド Bado Nazaire 氏の聞き取りを元としている。

サノウ氏（写真 14）は、2005年から2007年にかけて



写真 14 染色を行うサノウ氏

てボゴラン製作、また、空港でのボゴランの展示販売を手掛けていた。2006年の時点で、妻と学齢期の二人の子供をもつ。筆者が聞き取りを行う間もしばしば生活が逼迫していることを訴え、2006年当時から出身地でブルキナファソ北西部の穀倉地帯に位置するデドゥグ Dedougou 近郊の村に帰村して生活を立て直したい、という希望をしばしば口に出していた。サノウ氏が働いていたこの工房は、ワガドゥグ市南部の一角の住宅をアトリエとして使用している。サノウ氏は、このアトリエのオーナーとサノウ氏、さらに若い見習い3人で仕事をしていた。毎日2枚から3枚のボゴランが完成する。敷地内にある倉庫には、数百枚の在庫を持つ。観光客のシーズンの7月から9月にかけては、この在庫が底をつくほど販売できることがあるが、それ以外はほとんど売れないという。サノウ氏は、昼間は工房でボゴラン製作を行い、上記のように、夕方は空港や近い手工芸品販売店を営む友人を訪れ、販売の方にも尽力していた。しかし、ワガドゥグでのこうした営みは功を奏せず、2007年にその希望通りにデドゥグに戻り、サノウ氏は農業に従事している。

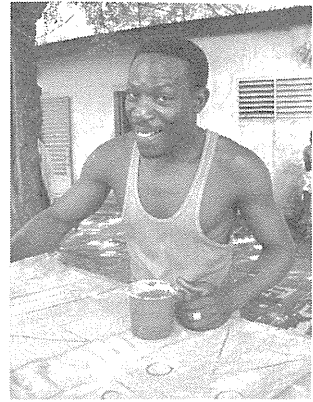


写真 15 バド氏

バド氏(写真15)は文化芸術観光省 *Ministre de la culture, des arts et du tourisme* 傘下の CNAA の一角でボゴラン製作と観光客向けのボゴラン製作のワークショップを行っている。CNAA は市中心部のグランポスト Grand Post の裏手に位置し、手工芸品販売店に隣接した、手工芸品街の一角に位置する。CNAA 内に置いてもボゴラン、バティック Batik をはじめとする手工芸品の販売を行っているが、同じく官営のヴィラージ・アーティザナ *Village Artisanal*⁹同様に手工芸品の定価販売を行っており、安全な手工芸品販売所として認知されている。

バド氏は日曜日を休日としているほかは、基本的に9時から20時、仕事が多い時は21時ころまでこの敷地で過ごす。夜間の仕事も可能なように、敷地の壁にはスポットライトが設置され、遅くまで仕事を行っていることがうかがい知れる。また、ワークショップをはじめとして、外国人との接触も積極的だ。聞き取りを行っている最中も、バド氏はしばしばボゴランの仕事に対する誇りを口にし、忙しいながらも自分の仕事に満足していることを語った。その内容は、自分たちの文化を外国人に伝えることへの満足であり、新たなデザインのボゴランを製作することで得られる充実感といったものであった。

4.2 ボゴランの販売

ボゴランはワガドゥグ市内のボゴラン専門店、手工芸品店で販売される。ワガドゥグの手工芸品の販売の中心は市南部にあるヴィラージ・アーティザナと市中心部にあるバグダ Bagdad¹⁰ と呼ばれる地域である。

ヴィラージ・アーティザナではボゴランの製作工房が併設されており、観光客が製作過程を見学できるようになっている。ここで販売されるのは、併設された工房で製作されたものが中心である。

一方のバグダでは、バド氏が製作する CNAA のボゴランや、サノウ氏のような市内外の工房で製作されたボゴランを中心に、マリヤコートジボアールで生産されたボゴランが販売されて

いる。バグダのボゴランは2007年末に他界したイブライム Ibrahim が取り仕切っていた。イブライムは、バグダに小さな店舗を切り盛りするほか、市内に2軒の部屋をボゴランの倉庫として借りていた。そこには数千枚のボゴランがストックされており、大口の取引にも応じていた。彼はバグダで販売されるボゴランの元締めであっただけでなく、手工芸品の路上販売を行う若者たちにボゴランを供給していた。イブライムの他界後、弟がこの小さな店を継いでいるが、現在はこの店で売られる商品は様変わりして、皮製品が中心になっている。

そして、ワガドゥグで販売されるボゴランの多くがブルキナファソ国内で生産されているものの、マリヤコートジボアールのもも多く販売されている。初見の観光客にはその差が分かりにくい、マリのもので説明されるものは、生地が厚く色使いがシンプルである。そして、コートジボアールのボゴランは薄くて目の細かい綿布が使用されており、マリのもと同様に色遣いはシンプルだと説明される。

さまざまなボゴランが店頭に並んでいるが、生産地や使用している色によってボゴランの価格が変わることはない。2006年から2007年には、ボゴラン生産者から販売者への卸値は3,500Fcfa前後であった。しかし、2008年になると、急激な物価高騰に合わせて価格は4,000Fcfa前後に上がっている。当然の成り行きとして、購入者への価格にも反映し、最低価格は、2006年当時の4,500Fcfaから現在では5,750Fcfaに上がった。

ボゴランをはじめとする手工芸品販売は、産業の少ないブルキナファソにおいて、主要産業のひとつになっている。多くの場合、インフォーマル・セクターに分類され、その経済活動は統計に現れにくい。さらに、ワガドゥグの手工芸品の製作から販売は、ブルキナファソ国内のみならず、西アフリカ、欧米諸国を巻き込んだものである。こうした手工芸品の流通経路については稿を改めて論ずることとする。

5. ボゴランの使用用途

最後に、ワガドゥグの人びとにとってのボゴランの位置づけについて付け加えておく。ワガドゥグにおいての、ボゴランの生活実用品としての位置づけはきわめて薄い。多くは欧米諸国から渡航してきた観光客やブルキナファソに赴任する欧米人たちが家族や知人のために持ち帰るために購入される。マリヤのボゴランを詳細に研究したロビンもその著書中で、ボゴランをファイン・アート、スタジオ・アート、手工芸品として位置付けてはいるが、そのうち2章分を使って手工芸品としての重要性を強調している (Rovine2006)。

もともと、このサイズの綿布は女性の腰巻に多く使用されていたようだ。ブルキナファソの名産であるアンディゴは、しばしば販売者から「ブルキナファソの女性が腰巻として使っている」とい説明をうける。しかし、現在、ワガドゥグの街中でそれを着衣として使用していることをほとんど見ることはない。つまり、今日のワガドゥグにおいて、ボゴランは観光客用の手工芸品の要素が強いといえるだろう。

6. 結語

本稿ではブルキナファソで生産されるボゴランの製作過程について論じた。ボゴランはマリヤのベレドゥグのバマナの人びとの間で生まれ、西アフリカ全体に広まった。現在、マリヤセネ

ガルでは科学染料を使用しているが、ワガドゥグのボゴランは、ほとんどが自然染料によって染色されている。

ボゴランは手工芸品として外国人に対して販売されている。ワガドゥグの人びとはボゴランを日常的に使用することはなく、観光のために販売されている。そのため、「伝統的」なデザインの意味はほとんど語られない。その代わりに、観光客にむけた手工芸品に特化したワガドゥグのボゴランが獲得した特徴は次の3点である。まず、マリのものよりも多くの色が使用されていること、ふたつ目により合理的な製作手法がとられていること、最後にデザインについては、多彩な色遣いを利用し自由度が高くなっていることである。

そして、ボゴラン制作は多数ある手工芸品の中でも、ある程度安定した需要を持つ製品であり、ワガドゥグでは家屋をアトリエとして使用して小規模な経営が行われている。ボゴランがワガドゥグの手工芸品として代表的な位置を占めているにも関わらず、ボゴラン制作によって生活するのはさほど簡単ではないことがサノウ氏の事例から分かる。しかし、バド氏のような安定的な制作が行われる人びとや、彼らと競い合う過程において、ボゴランのワガドゥグ的なスタイルが生み出されていると考えられる。

追記：本稿のデータは、2008年7月から9月の調査によって収集されたものである。この調査は日本学術振興会特別研究員奨励費によって可能となった。

注

¹ 出典 *ATLAS D'AFRIQUE BURKINA FASO*

² 出典 *Commune de Ouagadougou*

³ たとえば松田 1999、鈴木 2000

⁴ 手工芸品 *Tourist Art* については、スタイナーが以下の3点にまとめている。①アフリカン・アートに帰属する民族的混淆、ローカルな手工芸品への世界経済システムのインパクト②シンクレティックな神聖な芸術の製作においてイスラームとほかのアフリカの土着の信仰世界で分節化されていること③西欧的な工業製品がいわゆる「伝統的」なコンテキストと融合していること (Steiner 1994: 8)。

⁵ 女子割礼は通例としてFGM (Female Genital Mutilation) や女性器切除という語が用いられる。これらの語は開発のコンテキストで使用される語であり、多分に女性の立場に重点を置いたニュアンスをもつ。本稿では、この儀礼的な意味合いに重要性が高いため、女子割礼という語を用いる。

⁶ 1パイン (約 150cm x 70cm) が 3,750Fcfa (セーフア・フラン) で、綿布は 5,000Fcfa 前後。ちなみに、Fcfa は西アフリカの旧フランス領を中心に使用されている貨幣通貨で、1ユーロは 655.975Fcfa。

⁷ Kiri 社の洗剤がよいとされる (サノウ氏による)。

⁸ OMO 社の洗剤がよいとされる (バド氏による)。

⁹ 文化芸術観光省の管轄下にある公営の手工芸品製作・販売所。商品の原則的に定価が決まっているのが最大の特徴。ホテルなどでみやげ物購入を勧められるのはヴィラージ・アーティザナであることが多い。

¹⁰ 元々は 2003 年に消失したグラン・マルシェ Grand Marché の手工芸品売り場に店を構えていた者が、グラン・マルシェ消失後にワガドゥグ市の手配でこの地域に店を構えたのが始まり。バラージュに通ずる運河沿いとその裏側に 47 店の手工芸品が集まっている。運河側の約 30 店舗に関わる者のほとんどがムスリムであることと、災難 (= 火事) に遭った自分たちの状況を揶揄して、この地域の販売者自らがイラクの首都バグダット Bagdad (フランス語読みではバグダ) の通称で呼んでいる。

参考文献

松田 素二

1999『抵抗する都市 ナイロビ 移民の世界から』岩波書店

清水 貴夫

2007『アフリカ都市の若者文化の都市人類学的研究 ワガドゥグのラスタの事例から』名古屋
大学大学院文学研究科 2006 年度修士学位論文

2008「ワガドゥグのストリートの若者たちの生活とその背景」『名古屋大学比較人文学年報』
pp.137-154 名古屋大学大学院文学研究科比較人文学講座

鈴木 裕之

2000『ストリートの歌 現代アフリカの若者文化』世界思想社

Rovine, Victoria L

2006 *Bogolan: Shaping Culture through Cloth in contemporary Mali* Smithsonian(2ed edition)

COULIBALY, Augustin-Sondé

1974 *SAUVEGARDE DE L'ARTISANAT AFRICAINE-le cas du Burkina Faso* COULIBALY et Frères

Commune de Ouagadougou Secrétariat Générale Direction des Services Techniques Municipaux

2002 *Informations et Données Statistiques sur la commune de Ouagadougou*

Steiner, Christopher B

1994 *AFRICAN ART IN TRANSIT* Cambridge University Press

Danielle Ben Yahmed (Direction Générale)

2005 *ATLAS D'AFRIQUE BURKINA FASO* LES ÉDITIONS J.A

(しみず たかお／比較人文学)